

新刊紹介

東本願寺史料 第三卷

大谷派宗學院編修部編

本書は宗學院々長の命により、宗學院の編修部員諸氏が多年苦心蒐集せられた嚴如上人御生涯に於ける宗門關係史料を數年來整備せられ、既に一昨年二月、「達如上人時代」として嚴如上人の生誕文化十四年より、天保五年に至る前後十八年間を纏めて第一卷とし、同年暮「達如上人・嚴如上人時代」として天保六年より嘉永二年までの十五年間の資料が、第二卷として既に公刊を見てゐたのである。然るに今回、「嚴如上人時代」として嘉永三年より文久三年に至る間、十四年の記事が第三卷として刊行を見るに至つたのである。輯録さるゝ所、『上檀間日記』『諸國書狀留』『諸事之日記』『觸書留』『諸式留雜』『江戸來狀』『御納戸書翰留』『御堂日記』『上首寮日記』『粟津日記』『淺草御坊日記』『歲々錄』等十數部に及び、公武、門跡、一族、家臣、營繕、別院、末寺、教學、觸達の九部門に互り、一派内外に於ける巨細の事項を網羅されてゐる。殊に本書はその編輯に當り、周到緻密なる用意のもとに年月順に之を配列し、閱覽の利便を考慮して各

新刊紹介

々の本文の前に項目を掲げ、又原本の舊體を留むるために略字及び俗字等を改めず、更には讀解の便を計りて句讀點を施し、卷末に便宜な索引を附するなど、多大の苦心が拂はれてゐる。何れの史料も難解なるものにして、普通の人では到底判讀すなす能はざるものである。今これが上梓を見、容易に讀み得ることゝなつたことは全く讀者への一大福音であり、學界にとつて絶大なる慶事でなくてはならぬ。それだけ之が刊行の任に當られたる可西先生を始め、宮田、武田、石川、奥村各編修員諸氏の涙ぐましき過去の努力に對し、滿腔の敬意を表したいと思ふ。續いて明治時代の刊行近しと聞くが、願はくはこれに續いて大谷派史料全部の完成の一日もすみやかならんことを念願するものである。切に史家の所藏をすゝむると共に、宗門學徒の座右に敢て一本を備へられんことを望むものである。(東本願寺宗學院發行、菊判七八三頁、索引十三頁定價金七圓、限定出版)——(桑谷)——

日本佛教史觀

金子 大榮著

これは先の「佛教概論」「佛教の諸問題」の二名著に續く氏の第三番目の大著である。

この書に於て問題として採り上げられたものは現實——佛教的現實——日本の佛教である。「吾等の祖先は如何にして佛教

を受容せるか。日本佛教を貫くものは何か。吾等の日本佛教徒としてある位置は如何なるものか。これが此の書に於て果されんとする課題である。そしてかゝる課題への解答の萌芽は既に「佛教の諸問題」——特にその第一編——並にそれに續く「日本佛教の精神」「歸依三寶の精神」の中に散見するところであつた。随つてこの書は著者も云はれてゐる如く前著を「思想方式の基礎」としてその上に成立つたものである。

所でこの解答のための方法として著者は「日本佛教史を佛道の展開相に於いて觀んと」し、その爲に所謂「二つの眼」が用ひられる。即ち「聖德太子の聖旨を承けたものとして日本佛教を展望せしめ、且つ「その展望をそのまゝ親鸞聖人の眞宗へと收攝せしめ」んとするのである。随つて著者の立場は佛教が文化現象として種々に展開した跡を記述する文化科學としての佛教史學とは著しくその性格を異にする。

一般佛教史學に於て、文獻を整理し資料を解釋して或る一定の原理の下に之を組織化する、體系化するといふことは、云ふまでもなく理性の営みに外ならぬ。佛教の道理(眞理ではない)を理性の前に置き、理性の權利を主張することである。或は佛道の展開相と一般文化とを同列に置き何らかの形で之を結合せんとする試みである。佛教の道理の發現と人間活動とが同一平面上に置かれるのである。そして最高の位置を占むるのはこゝでは常に理性である。理性が對象を審くのである。併し著者の立場は之と全く反對である。理性が對象を審くのではなくして、對象に依つて規定され、呼びさまされるのである。理性が

審くのではなくして、むしろ「法」が開かれるのである。随つて一般佛教史學は著者にとつては却つて「特殊な研究」に過ぎず、佛教徒が佛教を聞信する立場ではない。かくて著者の佛教史觀はかゝる「法」の對象を主語とする賓辭として形造られたものであつて、此の書の偉大なる構想と美しき觀念とはかゝる佛教を聞信する立場に依る所産である。

この事は聖德太子の佛教に對する著者の理解の中にも端的に現はれてゐる。太子の佛教は三經の御疏を措いては論ぜられないのであるが、太子は三經を根據として何らかの思想體系を形造られたものではない。

太子の御説には後代の學僧の説く如く、所謂學的創見がない、太子は佛教の一信者として、「篤敬三寶」に終始せられたのである。それは太子が信位に立たれたことを意味する。澄淨を義とする信は謂はゞ白紙の狀態である。唯だ教法のまゝを尊く聞信する他には何もない。縱令、ものゝ是非があるととしてもそれは教法の内での是非であつて、自身の智解に依る再編成としてのそれではない。教法は己れの智解に依つてではなく、かゝる信の「無簡擇性」に依つて却つてその姿を全面的に現はすのである。太子の「歸依三寶」の心はかゝる信の立場であつた。そしてこの太子の立場が即ち著者の「二つの眼」の第一の——而も根本的な眼である。而もその眼に依つて貫かれ、太子の聖旨の展開としての日本佛教史の全體はそのまゝ親鸞の眞宗へ該攝する第二の眼を自ら成就せしめるものである。この第二の眼は恰も太子が信に依つて全佛教を領受せられた如く、著者自らが信に依

獨逸觀念論の研究

木村 素衛著

つて、日本佛教を受持せられてゐることを語るものである。著者が「日本佛教徒の一人として大なる傳統の流れに身を浸せる感激を有つ」と云はれる所以もそこにある。かくて著者の日本佛教の理解はいはゞ大法受持の「柔軟心」に依つて貫かれてゐると云つてよい。

以上著者の立場を私の理解し得る限りに於て一般佛教史學のそれと比較して紹介した。或はこの著に盛られてゐる個々の問題に就て紹介し、吟味しなければならなかつたのかも知れない。實際、著者が日蓮宗に密教的色彩の濃厚に存することを指摘せられたことや、親鸞の念佛と道元の禪との間に一脈の通ずるものあるを見出されたことは曾つての佛教史學には現はれなかつた卓見である。併し私はかゝる著者の創見を稱へるより、むしろ著者の根源的立場を紹介しそれと一般佛教史學との相違に注目することがより重大であると考へるのである。私の理解は恐らくは著者の企圖に全的に迫ることは能きなかつたかも知れない。私は私の理解がたゞ當らずと雖も遠からざるを希ふのみである。

この書が世に出でてから既に一年に垂んとする。その間、この書に對する一の紹介、一つの批判あるを私は聞かない。それは一般佛教史學の立場を以てしては著者の方法と認識とに參洞することの如何に困難であるかを示すものであるかも知れない。私は敢て著者の立場に迫らんとする不遜を犯した。私はたゞ頭を垂れて著者の寛容を俟たねばならない。

(洋菊四八一頁、價三、二〇 昭和十五年四月岩波書店刊)(河野)

新刊 紹介

本書は著者の第二論文集である。こゝには七つの論文が收められてあるが、それらは著者が學窓を出てから十數年の間に、色々な機會に執筆されたものゝ中、特に獨逸觀念論に關するものである。その内容を示せば次の如くである。

一、自己 同一

二、カントの noumena と先驗的自由

三、カントに於ける具體的普遍

四、カントに於ける der transzendente Gegenstand と

„affiziert werden“ とに就て

五、含蓄から顯現へ

六、理論と實踐

七、フイヒテの理論哲學

第一章 カントの回顧

第二章 範疇の演繹と範疇の意味

第三章 構想力の演繹

第四章 表象の演繹

この中、第二から第六までの論文は既に發表せられたものであり、最後の論文は西哲叢書中の「フイヒテ」と聯關のある未發表のもの、最初の論文は本書出版のために最近にかゝれたもの

獨逸觀念論に關心をもつものは、これらの巨匠達がいづれも容易ならぬ峻峯であることを知つてゐる。まさにそのゆゑに、これらの峻峯に向ふものにとつては、先達のよき手引が要望せられることまことに切なるものがある。著者はその思索の精緻さと論述の嚴密さとに於いて既に定評がある。このやうな著者の手になる本書こそ、實にかの要望にこたへるところの良き指針の書である、と私は確信する。敢てこゝに大方の一讀をすゝめる所以である。

（弘文堂刊行、菊版、本文四八二頁、定價四圓八拾錢）（大友）

對獨
照和
歎
異
鈔

池山榮吉譯

歎異鈔は今さら云ふまでもなく、親鸞聖人の晩年、その圓熟

譯者は希臘聖人の他力信仰に生を抜かれ、この歎異鈔にその全生涯をうち込まれた方である。しかも譯者が獨逸語に造詣の深かつたことは周知の通りである。このやうな譯者によつて歎異鈔が獨譯せられたのは、洵にその人を得たものと云はねばならない。本獨譯が成るについての因縁は「自序」に詳しく記されてあるが、兎に角、大正八年七月、東本願寺内佛教學會より刊行されたものである。それを今回、故譯者追想のために再版したのが本書である。

本書に於いて、色々な點で原譯書の改訂がなされてゐる。今「あとがき」によつてその主なる點を一二指摘すれば、原譯書の順序を變更し（或るものは省略し）、獨和對照といふ形式をとつたこと、原譯書は坊間流布本に據つてゐるが、本書は本學所藏端坊本（多屋教授著『歎異鈔新註』による）を採つて、獨譯との對照上差支へない限り、これに據つてゐること等である。

近時わが國古典の權威ある外國譯が次第にでき、日本文化を外國に紹介してゐるが、本書も亦その有力なる一つであると云つてよい。獨譯に際して譯者は隨分心血を注がれたことであらう、處へ、古各つちら聞てごうこまへ。○「はるかに見へる」

なく、歎異鈔のもつ特異の味に接しえない外人も、本書によつて充分その目的を達し、日本佛教の華として親鸞教の精髓にふれることができるであらう。

本書の内容目次は左の如くである。

Tanishcho

Nachtrag

Gelietwort

Vorwort

Einiges aus "Tanishcho"

(法藏館刊行、定價壹圓五拾錢)(大友)

救ひの論理

岡 邦 俊著

著者は「自序」にかく書いてゐる。「世界の宗教史上にあつて、親鸞ほど深くも鋭く、人間の本质について探求した人はあるまい。親鸞ほど謙虚な態度で、宗教的究竟の生活體驗を、心からしみんゝと諦認した人も少いであらう。絶對者の中に全我を捨てゝ没入し、醜き現實の自我と世相とを照らす聖にして無礙なる光明を、靜かに合掌し禮拜した人が親鸞であつた。そこに親鸞は救ひを見出し、人生の眞相に徹し、法悦に安住したのであつた。」また云ふ。「今の私の生活にとつては、まことに親鸞は生命の糧であり、人生の大導師である」。

新刊紹介

本書はこのやうな著者が親鸞の宗教と哲學とを、その體驗を通じて、鋭い思索と豊かな情操とをもつて、自由にしかも平易に叙べたものである。著者も斷つてゐる如く、本書は固より専門的な親鸞教學の解説ではない。が、そのことは何も本書の價值を低めるものではなく、本書には本書としての充分なる價值と意義とがある。讀者は本書によつて確かに親鸞の宗教と哲學の本質的なものにふれるに違ひない。左にその内容目次をかゝげ

- 第一講 序説(宗教とは何ぞや)
 - 第二講 自我の否定
 - 第三講 否定の否定と佛の發見
 - 第四講 受難者の悦び
 - 第五講 人間の本質と救ひの論理
 - 第六講 眞實と眞理
 - 第七講 他力の本願
 - 第八講 彼岸の世界
 - 第九講 矛盾律の破壊
 - 第十講 絶對の生命
- (同文館刊行、定價五拾錢)

——大友——